



口絵 37 (37、38) 魯漆室女

列女伝図の研究(三)

——和林格爾後漢壁画墓の列女伝図——

黒田 彰

口絵 (1—42)

一、和林格爾後漢壁画墓の列女伝図について

二、中室西、北壁三層の列女伝図

1、西壁三層の列女伝図 (1—9)

2、北壁三層の列女伝図 (10—18)

三、中室西、北壁四層の列女伝図

1、西壁四層の列女伝図 (19—28)

2、北壁四層の列女伝図 (29—35)

〔以下、
本誌所収〕

四、中室南壁の列女伝図 (36—42)

小稿は、一九七一年に発見された和林格爾後漢壁画墓の中室に描かれた、列女伝図全四十二図を紹介、その内容を報告するものである。当墓に漢代の列女伝図が現存することは、発掘当初から知られていたが、これまでその全容は、報告されたことがない。当墓の列女伝図は、有名な後漢武氏祠画像石のそれに匹敵ないし、それを越える文学史、美術史的価値をもつものであることを考えれば、このことは、極めて残念なことと言わねばならない。今般、私を含む幼学の会は、幸いなことに、当墓を管理する内蒙古文物考古研究所と、当墓の共同研究のプロジェクトを、発足させることが出来た。小稿は、その共同研究の一環として、内蒙古文物考古研究所から提供された、列女伝図の図像データに基づき、それを始めて本格的に紹介、報告する。さて、小稿の全体は、上掲の目次に示す如く、四章から成るものである。そして、公刊に際する紙幅の関係から、一、二(1—18)を本誌15号(平成20年11月)に、三、1(19—28)を佛教大学『文学部論集』94号(平成22年3月)に分載した。本誌に掲載するのは、三、2及び、四(29—42)に当たり、小稿分載の最終分となっている。

ところで、本誌15号に一括掲載したカラー口絵1—43についてはその後、37、38二図を一図と解釈すべきことが判明した。そこで、今回37、38を一図の口絵37として掲げ直し、39—43の番号を一つずつ前へずらして、38—42と改めたことを、ここに断わっておきたい。

(三、中室西、北壁の列女伝図)

2、北壁四層の列女伝図 (29―35)

29 楚昭貞姜図 (口絵 29)

↑ 榜題「楚昭貞姜」

本図は、北壁四層の最初の列女伝図である。本図から列女伝巻四貞順伝の図が、二図続く。また、本図から三図、水災と火災とをモチーフとする劇的な場面が続き、画幅がこれまでより広く取られ、使者など複数の人が登場し、建物等も描かれた、特徴的な画面構成となっていることに注意すべきである。このような特徴はこれまで、西壁四層始めの19魯秋潔婦図(図四十五、口絵19)にしか、見られなかったものである。図七十二に、当墓の楚昭貞姜図を掲げる。榜題四字目の「姜」字は薄れてしまっている。本図は、列女伝巻四貞順伝10楚昭貞姜に基づくものである。その粗筋を示せば、次の通りである。

楚昭貞姜梗概

貞姜という女性は、斉侯の女で、楚昭王の夫人である。或る時、昭王が出遊し、夫人を漸台(水上の楼台)に留め置いて去ってしまう。王は、折しも揚子江(長江)の水が溢



図七十二 楚昭貞姜図

れ、間もなく大きな洪水が漸台を襲うことを聞いて、急ぎ使者を遣し、夫人を迎え取ろうとするが、その使者に王使の割符かりふを持たせ忘れてしまう。使者が漸台に到着し、夫人に台を出るように求めるが、夫人は、次のように言う。

「王との約束により、王が宮女を召される際には、必ず割符を用いる決まりとなっている。しかし、あなたは今その割符を持っていない。だから、決まりの通り、私はここを出ることが出来ない」と。使者が、「今にも大洪水がここに押し寄せようとしている。割符を取りに戻る暇はない」と言うと、夫人は、次のように言う。「私は、貞女の義は約束に従い、勇士は死を恐れないと聞いている。私に出来ることは、貞女としての節操を守ることだけである。あなたに従ってここを出るならば、生き残ることが出来る。ここに留まるならば、必ず死ぬであろうことは、私にはよく分かってる。けれども、貞女の義を仮のものとし、一時にせよ約束に背いて、自分の生命だけを考えることは、また、貞女の義を全うし、ここで死ぬことに較べて、到底及ばないだけのことである」と。使者は已むなく割符を取りに戻り、再び漸台に赴くが、既に漸台は洪水に吞まれて崩解した後で、夫人も水に流され死亡していた。楚昭王は、次のように言う。「ああ、夫人は貞女の義を守り節操に身を捧げて、仮初の生命を求めようとはしなかった。約束に

おける信を貫くことで、見事に貞を成し遂げた」と。そして、昭王は夫人に対し、貞姜という尊号を贈ったのである。

本図は、右向きに立つ楚昭貞姜と、左を向いて立つ使者を描く。その使者は、何かを捧げているようである。本図は、漸台において、台を去るよう、求める使者と貞姜とが、対話する場面を描いたものであろう。図七十三は、武梁祠三、二石に互る（第一層）楚昭貞姜図を掲げたものである（榜題「楚昭貞姜」「使者」）。屋内（漸台であろう）に坐する貞姜（右端に二人の従者へ左は便面



図七十三 楚昭貞姜図



図七十四 楚昭貞姜図（伝顧愷之筆摸刊）

と呼ばれる扇を持つ、貞姜の左に一人の従者が立つ、左端に旒を持つて跪く使者を描いている。本図に対し、貞姜と使者の左右が入れ替わるが、貞姜と使者とが対話している場面である点、両図が同じ構図を有することは、明らかと言えよう。また、図七十四は、伝顧愷之筆の摸刊図を示したものである（榜題「符使者」「漸台」。貞姜のそれを脱落させるか）。それは貞姜の腰掛ける姿ではあるが（推し寄せる水などは、後から描き加えられたものらしい）、両図の構図を継承していること、中でも、本図のそれと酷似することに注目す

べきであろう。特に、図七十四の使者の榜題が「符使者」とされ、本図の使者も何かを捧げていることは、非常に興味深い。

30 宋恭伯姫図（口絵30）

↑ 榜題 —

図七十五は、当墓の宋恭伯姫図を示したものである。榜題は読み取り難いが、前述の如く、前後の並びや特徴的な図柄などから、火災をモチーフとする宋恭伯姫図と推定される図像である。本図の基づいたであろう列女伝巻四・2 宋恭伯姫の粗筋を示せば、次の通りである。

宋恭伯姫梗概

伯姫というのは、魯宣公の女で、成公の妹に当たる。その母親を繆姜（びゅうきやう）と言う。折から伯姫を宋恭公に嫁がせようとしたが、恭公は親迎（しんげい）（結婚の六礼の第六。婿が親（みすか）ら嫁の実家へ行き、迎える挨拶を述べる儀式）の礼を執ろうとしない。伯姫は、その振舞を気にしたが、親に強制されて仕方なく、宋恭公の許へと赴く。伯姫が宋に入り、三月の廟見（けん）を経て、夫婦の道を行う筈が、伯姫は、先に恭公の親迎しなかったことを楯に取り、どうしても恭公の命令を聴こうとはしない。困り果てた宋恭公の臣下が、事情を魯に告



図七十五 宋恭伯姫図

げたので、魯は大夫の季文子を宋へ遣し、伯姫に訓戒させる。魯成公と繆姜は、その季文子の働きを心から労った。

伯姫が宋に嫁して七年後、恭公が亡くなり、伯姫は寡婦の身となった。景公の代に入って、伯姫は夜火事に見舞われる。左右の者が、「直ちにここを避難されよ」と言うと、伯姫は、次のように言う。「婦人の義にあつて、保母と傳母（共に、貴人の娘の養育に当たる守役）とがいなければ、夜間に堂を下りることはない。保母、傳母は何処にいるのか」と。やがて保母は来たが、傳母が来ない。回りの者が、「直ぐにここを退出されよ」と言うと、伯姫は、次のように言う。「婦人の義にあつて、傳母がいなければ、夜間に堂を下りることはない。義を仮初（かりそめ）のものとし、生命のみを追求することは、義を守って死ぬことに較べ、遙かに及ぶものではない」と。かくて伯姫は、火に巻かれて死んだのである。春秋（穀梁伝）には、そのことを詳しく記し、「伯姫を賢女とする」と述べて、「婦人というものは、貞順を指針として行動すべきである。伯姫は婦道を尽くした」と評している。さて、伯姫の死を聞いた諸侯は皆、深く悲しんで、死者を甦らせることは出来ないが、財産は復興出来るので、澶淵（せんえん（河北省））に集まって、火災による宋の損失を、補填（ほてん）することにしたのである。春秋はそのことを褒めている。



図七十六 宋恭伯姬図（伝顧愷之筆摸刊）

本図の特徴は、画面中央の宋恭伯姬の周囲に建物描かれ、就中、伯姬の上に画かれた黒い屋根の下、また、赤い線で画かれた床の下から、炎が吹き上げていることである。このことから、水災をモチーフとする、左の29楚昭貞姜図に続く本図が、同様に火災をモチーフとするものであることが知られるのである。伯姬は、その炎上する建物の中に、右を向いて坐っている。伯姬の右、建物の外側に、伯姬の方を向いて立つ人物が描かれているが、それはおそらく伯姬を迎えに来た保母であり、火難に見舞われた屋敷を退出するよう、

伯姬に勧めている場面を描いたものであろう。本図は目下、伝顧愷之筆摸刊の図を例外として、他に類例を見ない極めて珍しいもので、列女伝図研究史上、非常に貴重且つ、重要な注目すべき資料と言えるであろう。図七十六に、伝顧愷之筆の摸刊図を掲げる（榜題「宋恭伯姬」「保母」）。図七十六は、右に、炎上する建物の中に坐る伯姬、左に、伯姬の方を向いて立つ保母を描いている。図七十六と本図とは、左右が反転しているが、炎に包まれた館に坐る伯姬の状態や、対する保母の様子など、例えば前述、魯秋潔婦図（図四十五）、楚昭貞姜図（図七十二）の場合と同様或いは、より明確に、両図の構図の殆ど同じであることが、見て取られることに改めて注目したい。即ち、本図と図七十六との密接な図像的関連は、顧愷之の列女伝宋恭伯姬図が、漢代の列女伝図からその構図を借り、踏襲した事実を、ほぼ疑問の余地なく示すものである。このことは、中国美術史における、顧愷之の画風の成立に新たな視点を切り拓く、大変重要な具体的新事実を齎すものであり、一方において、和林格爾後漢壁畫墓の列女伝図についての美術史的、文学的再評価を、改めて要請せずにはおかぬものがあるだろう。

31 梁節姑姉図（口絵31）

† 榜題「梁節——」

本図から再度、列女伝巻五節義伝の図となる。話数が続く32魯孝義保（巻五・1）以下と転倒するのは（本図は巻五・12）、火災のモチーフを共有する本図を、左の宋恭伯姫図と隣接させようとしたためであろう。なお、当墓西壁四層が、巻五・9魯秋潔婦、10周主忠妾以下から始まっていたことは、前述の通りである。図七十七に、当墓の梁節姉妹図を掲げる（姉妹は、父の姉で、伯母のこと。姉妹が正しいが、節姉妹が尊号であることにより、かく称する）。榜題は、屋根の左の梁字以外は、その下に纔かな残画を留めるのみである。本図の典拠となった列女伝巻五・12の粗筋を示せば、次の通りである。

梁節姉妹梗概

梁の節姉妹というのは、梁（河南省）の婦人のことである。折しも婦人の家が火事になる。家の中にはまだ、兄の子と自分の子がいる。婦人は、兄の子を助けようとして火中に入るが、我が子を救出してしまい、兄の子が救出出来ない。その間に家全体が炎に包まれ、再び中に入ることは、もはや不可能となる。それでもなお、婦人は進んで火中に入ろうとするので、友人が婦人を引き留めて、次のように言う。「あなたはそもそも、兄の子を助け出そうとして火中に入



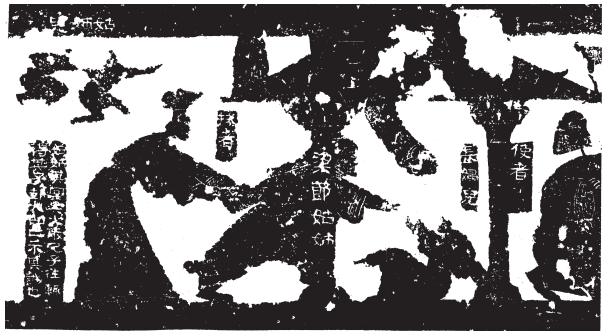
図七十七 梁節姉妹図

り、結果として、偶々自分の子供を助け出してしまっただけのことである。だから、あなたはこれ以上、心中にあればこれ思い悩む必要はない」と。すると、婦人は、次のように言う。「この広い梁国で、どうしてそのことを一戸一戸に告げ知らせることなど出来ようか。また、私は、我が子を助けて兄の子を見殺しにした、不義の名を冠せられ、一体どのような面目があつて、兄弟や国人に、顔を合わせられようか。また、私には、助け出してしまった我が子を再度、火中に投じたいという気持もあるが、それでは、子供に対する母親の愛を欠くことになる。このような大勢を背負って生き続けることは、私には、とても出来そうになり」と。かくて、婦人は火中へと赴き、死んだのである。

本図は、画面中央に家屋を描く点、図七十五の宋恭伯姫図とよく似ているが、本図の屋根は、線で丁寧に画かれている。屋根の下から炎が吹き出し、火事を表わしていることも共通する。建物の右から屋内へ入ろうとしているのが、梁節姑姉である。顔はやや上向きに真っ直、左を向き、右手は屋中に入っている。右足が建物に掛かり、その裳裾が建物から斜め右下へと、長く引かれている。左方に一人の女性が立ち、梁節姑姉の左手を掴んでいる。屋内中央には、発掘当初からの剥落があつて、確認しにくいが、剥落の下

に小さな人物の描かれていた形跡があつて、おそらく逃げ遅れた兄の子であろうと思われる。建物の左にも一人の人物が左を向いて立っており、壺を捧げているようで、消火活動を表わすか。これらのことから、本図は、炎上する建物へ再度赴き、兄の子を助けようとする梁節姑姉と、それを引き止めようとする友人を、描いたものであることが知られよう。

図七十八に掲げるのは、武梁祠二石一層に描かれた、梁節姑姉図である（榜題「長婦児」「梁節姑姉」「拯者」「姑姉児」、題記「姑姉其室失火、取兄子往、輒取其子、赴火如亡、示其誠也」。長婦は、兄嫁、拯は、救に通じ、救う意）。この図七十八は、本図の左右を丁度、反転させたものとなっている。即ち、左足が建物に掛かり、右足は



図七十八 梁節姑姉図



図七十九 梁節姑姉図（伝顧愷之筆摸刊）

遠く左方へ引かれている。左手と顔は、屋中に入っている。そして、その右手を、一人の女性（「掠者」）が掴んで引つ張っている。屋内右下に腰を突いて、左手で体を支え、梁節姑姉の方へ右手を差し延べているのが、兄の子である。また、画面左端の二行題記の上に、二人の小人が描かれ、上欄に「姑姉児」と榜題されているのは、始めに火中から救い出してしまった、梁節姑姉の子供を表わしているのであろう（芸文類聚八〇火部火所引列女伝に、「兄子与三子」在「内」などとある）。興味深いのが、図七十八には本図と酷似する屋根が描

かれ、その軒から吹き上がる火災がやはり、描き加えられていることである（容庚氏注²⁹前掲『漢武梁祠画像考釈』に、「火燄当屋簷下垂」へ14丁裏」と言われる）。これらの図柄から、図七十八も本図と同様、再度火中へ赴こうとする梁節姑姉を、その友人が引き止めようとする場面を、描いたものであることが知られる。そして、本図と図七十八とは余りにもその構図が近いことから、両図に共通する、漢代列女伝図の粉本のあったことが、確実であろうと思われる。さて、図七十九に掲げるのは、伝顧愷之筆の摸刊図である（榜題「隣婦」「梁節姑姉」。図七十九を見ると、梁節姑姉と友人（「隣婦」とが離れた形ではあるが、伝顧愷之筆の摸刊図の構図は、本図と全く同じであることが分かる。屋根の下から炎の吹き出している点も、よく似ている。ただ、図七十九においては、例えば図七十八の左上に描かれていた子供が、空いた梁節姑姉と友人との間に移されている。図七十九の摸刊図も、顧愷之の梁節姑姉図が、漢代のその構図をほぼ忠実に踏襲していることを、物語るものと見て良いであろう。

32 魯孝義保図（口絵32）

↑ 榜題「——保」

図八十に、当墓の魯孝義保図を掲げる。北壁四層の列女



図八十 魯孝義保図

伝図は、本図から再び一女一図の形式に戻る。それが終りまで四図続く（32魯孝義保図―35代趙夫人図）。また、それらの四図は目下、いずれも伝顧愷之筆の摸刊図以外に類例の見当たらない、貴重な列女伝図となっていることに注意すべきである。なお本図の前の梁節姑姉図が、列女伝巻五・12に相当していたのに対し、本図から列女伝巻五・1以下へ戻る形となっていることも、前述の如くである。本図の榜題の上の三字は、発掘当初からの薄れと剝落により、判読し難い状況にある。本図の基となった列女伝巻五・1の粗筋を示せば、次の通りである。

魯孝義保梗概

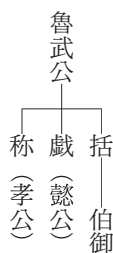
孝義保という女性は、魯孝公称の保母で、臧氏ぞうしの寡婦である。始め、孝公の父の武公は、長男括かつ、次男戲を伴って、周宣王に朝覲した。宣王は、戲を立てて魯の太子とする。やがて武公が亡くなり、戲が魯の君主となる。これが懿公である。その頃、孝公はまだ公子称と呼ばれ、年が最も若かった。義保は、自らの子と共に公子の宮中に入り、公子称の養育に当たったが、折しも括の子の伯御が、魯の国人と謀って乱を起し、懿公を攻め殺して、自ら魯君となった。伯御は、公子称をその宮中に捜し求め、殺してしまおうとする。一方、義保は、伯御が称を殺そうとしていることを聞いて、我が子に称の衣服を着せ、称の寝室で眠らせておく。伯御は、称の格好をした子供を見付け、その子を殺してしまう。その隙に、義保は称を抱いて、宮中から脱出する。宮の外で、義保は、称の舅しゅうと（母親の兄弟）に当たる、魯の大夫と出会う。舅が、「称は死んだのか」と問うと、義保は、「いや、無事でここにおられる」と答える。舅が驚いて、「一体どのようにして、あの窮地を逃れることが出来たのか」と聞くと、義保は、「我が子を公子の身代わりとすることによってである」と言う。かくて、義保は公子称と共に、伯御の手を逃れることが出来たのである。それから十一年が経過して、魯の大夫は皆、公子称が無事、



図八十一 魯孝義保図 (伝顧愷之筆摸刊)

義保の許で養育されていることを知る。そこで、魯の大夫達は、周の天子に請うて伯御を処刑し、代わって称を魯の君主に立てた。これが魯孝公である。魯の人々は、父母の示した義の高いことを称賛し、これを義保と呼んだ。論語に、「六尺の孤（父が早く死に、幼少で即位した、孤児の君主）を託すことが出来る」（泰伯）とあるのは、この義保のことを述べたものである。

に命を救われた魯孝公に関連する、簡単な系図を示そう。



本図は、左向きに立つ魯孝義保を描いたもので、顔の表情などがよく残る。注意すべきは、破損、薄れがあつて見にくいのが、魯孝義保は公子称（孝公）を抱いているらしく、胸の左の辺りにその痕跡が確認出来ることである。本図における、そのような図様を推測させるのが、次に掲げる、伝顧愷之筆の摸刊図なのである。図八十一に、伝顧愷之筆摸刊の魯孝義保図を示す（傍題「孝義保」「公子称」「括子御」「孝義保子」。図八十一は、画面右に、称を抱いて逃げる魯孝義保、左に、剣を握って称を殺そうとする伯御と、魯孝義保の子供を描いている。図八十一右の魯孝義保は、本図の逆を向いているが、唯一その古い作例である本図は、その源流に当たるものとして、極めて貴重な遺品であることが間違いない。

33 楚昭越姬図（口絵 33）

↑ 傍題「楚昭越姬」

図八十二に示すのは、当墓の楚昭越姬図である。本図と次図（34 蓋将之妻図）の両図は、共に右を振り返る形、対する次々図（35 代趙夫人図）がそれを受けて、左向きとなっている。本図の基となった列女伝巻五・4の粗筋を示せば、次の通りである。



図八十二 楚昭越姬図

楚昭越姬梗概

楚昭越姫というのは、越王句踐の女で、楚昭王の姫妾のことである。或る時、昭王が宴遊すると、常の如く蔡姫が左に、越姫が右に並んで先に進む。王は四頭立ての馬車を駆り、それを追う。かくて、王の車列は附社の台に登り、雲夢（湖北省）の苑を見下ろすと、後から士大夫の追ってくるのが見える。王は、悦びの内に二姫を顧みて、「楽しいか」と問う。蔡姫が、「楽しい」と答えると、王は、「私の願いは、あなたと共にこのように生き、また、共に死ぬことである」と言う。蔡姫は、「無論のこと、私の願いは、

王と共に生きて楽しみ、また、王と共に死ぬことである。それ以外にあり得ようか」と言う。その時、王は史官の方を振り返り、「蔡姫は私と共に死ぬことを願う」と記録させた。王はまた、越姫に、「楽しいか」と問う。蔡姫は、「楽しいことは楽しいが、このようなことは、長くは続かない」と答える。王は、「私の願いは、あなたと共にこのように生き、また、共に死ぬことである。私の願いは、協えられようか」と聞く。すると、越姫は、次のように答える。「私は心中、やがて王が先君の楚莊王を見做つて、現在の享樂的な生活を改め、本来の政務に復帰なさることを、密かに期待していた。ところが、王は今、私に死ぬことを要求されている。思えば、かつて父がこの婚姻を承諾した際に、殉死などを約した筈がない。私は、諸姑（父親の姉妹）から、次のことを聞いている。婦人は、己が死ぬことで君の善を明らかにし、寵愛を一層深いものにする、と。しかし、君の愚かな死に、ともあれ殉死することは、名譽なことである、などとは聞いていない。故に、私は、この命令に従おうとは思わない」と。王はそれを聞いて内心、自らの非を悟り、また、越姫の言葉に敬意を抱きはしたが、なおも蔡姫を寵愛し続けた。

楚昭王が即位して二十五年目のこと、王は陳国の救援に出征する。二姫も付き従う。ところが、王は軍中で病気に

掛かり、空を見上げると、赤い雲が左右から日を挟み、恰も飛んでいる鳥のようである。奇異に思った王が、周の太史（天文、歴史を掌る官）を呼んで訳を尋ねると、太史は、「これは、王の身に害が生じる兆（きざし）である。但し、その害は、側近の將軍や宰相に移してしまうことが出来る」と説明する。それを聞いた將軍、宰相は、競って自分に害を移すよう、王に懇願するが、王は、「お前達は私の股肱（ももとひじ）である。私の体の別の部位に害を移した所で、私から害が離れたことになろうか」と言って許さない。蔡姬が、「この人々は、自ら王に代わりたがっている。それを、どうして代わらせてやらないのか」と言うと、越姬は、次のように言う。「あなたの徳は偉大であり、私は君王に従って死にたく思う。先の殉死の話は、淫楽の遊びから出たことなので、私はきっぱり拒絶した。けれども、あなたが礼法に戻られるに及び、今の国人は挙って、君王に代わり死のうとしている。まして私の如き者が死を望まないでいられようか。あなたより一足先に、あの世へ赴くことを許されよ」と。王が、「以前の殉死の話は、私の冗談である。だから、もしあなたが実際に死んでも、それは、私の不徳の表われにしかないのだ」と言うと、越姬は、次のように言う。「以前、口にこそしなかったが、私は王と共に死ぬ決心をした。私は、次のことを聞いている。信と

は、心に背かないことで、義とは、空約束をしないことである、と。私は、王の義に殉じ、好色に殉じるのではない」と。かくて、越姬は自殺した。

やがて昭王の病気が重くなる。王は位を三人の弟に譲ろうとするが、弟達は誰もそれを受けようとしなない。王は軍中に没した。しかし、蔡姬は遂に死ぬことが出来なかった。王弟の子閭は、残る二人の子西、子期と図って、「立派な信を備えた母親の子は、必ず仁を備えているものだ」と言い、改めて軍を配し陳門を閉じて、そこに越姬の子供の熊章（しょうしょう）を迎え入れ、君主に立てたのである。これが楚恵王である。その後、休戦して帰国し、亡き昭王を葬った。

本図は、左向きに立つて右を振り向く、楚昭越姬を描いたものである。図八十三に、伝顧愷之筆の摸刊図を掲げる（榜題「蔡姬」「楚昭王」「越姬」。図八十三は、楚昭王を中心として右に蔡姬、左に越姬を配する図柄となっているが、本図は、左の越姬図の源流に溯る、目下唯一の図像として、非常に貴重な遺品となっている。

34 蓋将之妻図（口絵34）

↑ 榜題「蓋将之妻」

図八十四に、当墓の蓋将之妻図を掲げる。剝落が極めて



図八十三 楚昭越姫図（伝顧愷之筆摸刊）

少ないにも関わらず、発掘当初から全体的に薄れていることが惜しまれるが、本図の保存状態は、非常に良い。本図の基となった列女伝巻五・5の粗筋を示せば、次の通りである。

蓋将之妻梗概

蓋（陝西省）の副将、邱子の妻のことである。或る時、戎が蓋を伐つて、その君主を殺した。戎は、蓋の群臣に命令して言う。「もし進んで自殺する者がいたら、その妻子は一人残らず処刑されよう」と。一方、邱子は自殺を図ったが、人に救われ、死ぬことが出来なかった。邱子が帰宅すると、その



図八十四 蓋将之妻図

妻は、次のように言う。「私は、次のことを聞いている。将たる者の節義は、勇敢であり、死を恐れぬことである。だからこそ、兵卒達が力の限り戦って、戦死を恐れず、また、戦争に勝って、領土を獲得することが出来る。その結果として、国家を末長く維持し、君主を安心させることが可能となるのである、と。そもそも戦いに臨んで、勇敢さを等閑にするのは、孝に背く行為である。また、君主が死んで、臣下が生き残るのは、忠ではない。今や戎との戦いに敗れ、君主は亡くなられた。それなのに、あなた一人がどうして生き残っているのか。己の内に忠孝二つを失いな

がら、あなたは、どうしてこつそり帰宅出来たのか」と。
邱子はそれを聞いて、次のように言う。「蓋は小国で、対する戎の軍事力は大きい。私は自分の能力の限りを尽くして戦った。不幸にして君主が亡くなり、無論のこと、私は自殺しようとした。ところが、人に救われ、死に切れなかったのである」と。そこで、その妻が、「当時は助ける人がいたとして、どうしてその後、自殺しなかったのか」と聞く。邱子は次のように言う。「私は命を惜しんでいるのではない。私が死ねなかった理由は、戎が命令して、自殺者はその妻子に誅が加えられる、と言ったためである。今更私が死んだからといって、君主に何の利益が齎されるのか」と。すると、その妻は、次のように言ったのである。「私は、主が心配すると、臣は恥じ、主が辱しめを受けたら、臣は死ぬものである、と聞いている。今や君主が死んだにも関わらず、あなたは生きています。これが義と言えますか。また、多くの兵卒を死なせ、国を存続させることも協わず、自分だけは生きています。それが仁と言えますか。妻子を案じて仁義を忘れ、亡き君主に背いて強暴な敵に仕える。そのようなことが忠と言えようか。人として忠臣の道と仁義の行いとを失って、何が賢と言えようか。周書には、君を先として臣を後にし、父母を先として兄弟を後にする。兄弟を先として友人を後にし、友人を先として妻子

を後にする、と述べられている。妻子は私愛に過ぎないが、君に仕えることは公義である。思うに、あなたは現在、妻子のため、人臣としての節義を失っている。即ち、君主に對する礼法もなく、忠臣の公道を棄ててしまった状態である。言わば、妻子との私愛を図り、天から生を盗んで、借り物としての生活を送るようなことは、卑しい私共でさえそれを恥じる。ましてやあなたにとつては、尚更のことではないか。だから、私には、あなたと共にそのような恥を蒙りながら、生きてゆくことが、到底出来そうもない」と。かくて、その妻は自殺し、邱子もまた、妻の後を追ったのである。戎の君主は邱子夫妻のことを聞いて、その妻を賢女とし、太牢たいろう（牛、猪、羊の三種が揃った、立派な御馳走）を捧げて祠ほくらに祭り、將軍の礼を用いて夫婦を葬った。その弟には金百ひゃく銖しゆを賜たまつて卿けいに任じ、元の蓋国を分割統治させた。

本図も、33楚昭越姫図と同様、左向きに立つて右を振り向く、蓋将之妻を描いたものである。また、前者の衣裳が黒いのに対し、こちらは赤い。図八十五に示すのは、伝顧愷之筆の摸刊図である（榜題「蓋将之妻」「将丘子」。伝顧愷之筆摸刊本等、邱を丘に作る）。図八十五は、画面右に、左手に劍を握り胸許に擬して、自害しようとする蓋将之妻、



図八十五 蓋將之妻図（伝顧愷之筆摸刊）

左に、右を向いて立つ郎子を描いている。本図の蓋將之妻も、剣を手にしている可能性があるが、判然としない。ともあれ、本図は、図八十五右の蓋將之妻図の源流を示す、現存唯一の珍しい遺品として、極めて貴重なものである。

35 代趙夫人図（口絵35）

↑ 榜題「代趙夫人」

図八十六に、当墓の代趙夫人図を掲げる。本図は、北壁四層の最後の列女伝図である。また、前図（列女伝巻五・5）と本図（巻五・7）の間に位置する、魯義姑姉図（巻五・6）が南壁へと回されていることは、前

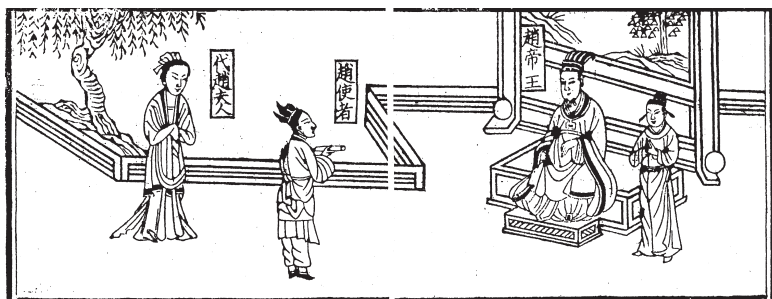


図八十六 代趙夫人図

述の如くである。本図の典拠となった、列女伝巻五・7の粗筋を示せば、次の通りである。

代趙夫人梗概

代（山西省）の趙夫人（ちようふじん）というのは、晋の趙簡子の女で、趙襄子の姉に当たり、また、代王の夫人のことである。折しも晋では、亡くなった趙簡子の葬儀が執り行なわれた。代を伐とうとする襄子は、まだ父の服喪期間中であるにも関わらず、北方の夏屋山（かきやま）に登って、そこへ代王を誘い出す。襄子は、料理人達に予め柄杓（ひしゃく）を配っておいて、代王と従者



図八十七 代趙夫人図（伝顧愷之筆摸刊）

に酒を飲ませる。そして、柄杓に酒を汲む振りをしながら、代王と従者をそれで殴り殺させた。挙兵した襄子は代国を平定し、姉の趙夫人を迎え取ろうとする。ところが、夫人は、次のように言う。

「私は、父の老君の命によって代へ嫁ぎ、十余年になる。その間、代は何の過ちも犯していない。

それを、趙君のあなたは、私の夫を殺した上に、代の国を滅ぼしてしまった。このような私に一体、帰る所などあり得ようか。

私はまた、婦人の節義として、二夫に見えることではない、と聞いている。

だから、私は再婚しない。それなのに、あなたは私

を迎え取って、何処へ行かせる積りなのか。思うに、弟のために夫を軽んじることは、義に背くことである。一方、夫のために弟を怨むことも、仁から外れることになる。だから、私はあなたを怨みはしない。けれども、私は決して趙に帰らない」と。かくて、夫人は天に向かつて号泣し、摩笄^{まけい}の地において自殺したのである。代の人々は皆、夫人のことを思い偲んだ。

本図は、左向きに立つ代趙夫人を描いたものである。裾の部分の荒れていることを除けば、保存状態も甚だ良い。

図八十七に掲げるのは、伝顧愷之筆の摸刊図である（榜題「趙帝王」「趙使者」「代趙夫人」。図八十七は、画面右に、侍者と趙王（趙襄子であろう）、左に、趙の使者と代趙夫人との、四人を描いたもので、代を伐った趙襄子が、姉の代趙夫人を迎えようとして、代へ使者を送った場面を表わすものと思われる。本図は、図八十七左端の代趙夫人図の源流を示すもので（向きは逆になっている）、目下確認し得る、唯一の作例として、注目すべきものである。

四、中室南壁の列女伝図（36—43）

36 魯義姑姉図（口絵 36）

↑ 榜題「軍吏」「義婦」



図八十八 魯義姑姉図

図八十八は、当墓の中室南壁一層に描かれた、魯義姑姉図を掲げたものである。なお本図は、左側に描かれた列士図に続くもので、本図が南壁における最初の列女伝図に該当する。本図の基づいた、列女伝卷五・6の粗筋を示せば、次の通りである。

魯義姑姉梗概

魯の義姑姉ぎこしというのは、魯の郊外の婦人のことである。或る時、齊の国が魯の国を攻めた。齊軍が魯の郊外に至ると、遙か遠方に、一人の婦人が一児を抱き、もう一児の手を引きながら、逃げて行くのが見える。齊の軍勢はそれを追う。軍勢が近付くと、婦人は、今まで抱いていた方の子を追端に捨て、手を引いていた方の子を抱きかえ、山に向かって逃げ出した。捨てられた子はその跡を追ひ、声を上げて泣き叫んだが、婦人はひたすら先へと逃げ続け、その子のことを顧みる様子はない。齊の將軍がその子に、「逃げて行くのは、お前の母親か」と問うと、「そうだ」と答える。「母親は誰を抱いているのか」と問うと、「知らない」と答える。齊の將軍はそれを聞いて、直ちに婦人を追う。さて、逃げる夫人の背後から、兵士が弓を引いて、狙いを定め、「止まれ。止まらなければ、お前を射殺する」と命じたので、婦人は漸く立ち止まって振り返る。そして、齊の

將軍が、「お前は一体、誰を抱いているのか。また、先程見捨てたのは誰なのか」と問うと、婦人が答えて言うには、「私が抱いているのは、兄の子である。また、見捨てたのは、私の子供である。斉の軍隊が私の間近に迫ったが、私には二人の子供を守るだけの力がない。そこで、仕方なく私の子供を見捨てたのである」と。斉の將軍が、「おそ母親というものは、自らを分かち与えた愛情（親愛）を己の子供に抱くものである。子供との関係が裂かれる、母親の心の痛みは、並大抵ではない筈だ。それなのに、先程、お前が自分の子供を見捨て、兄の子の方を抱いて逃げたのは、一体どういう訳か」と問うと、婦人は、次のように答える。「思うに、私と我が子との関係は、私愛に過ぎず、しかし、兄の子とのそれは、公義というべきものである。そもそも公義を捨てて私愛を取り、兄の子を見殺しにして己の子を助けたならば、例えこの場合はうまく切り抜けられたとしても、まず魯君が私を許さず、また、大夫は私を生かしておかず、庶民や国人は私を敵視しよう。この魯の国において一旦、そうなってしまうば、私が如何に肩を狭めようと、もはや私の入る余地は何処にも残されておらず、例え足を重ねた所で、私の踏めるような場所を見付けることは出来まい。子供には可愛そうだが、私には公義に互えることはどうしようもない。だから、私は子供を見捨てる痛

みを押して、義を取ったのである。この魯の国で義を失つたら、生きて行くことは難しい」と。すると、斉の將軍は、全軍に命じて進軍を中止する。そして、使者を遣して斉君に言わせるには、「斉はまだ魯を攻撃すべきでない。我が軍が国境を越えた所で、意外なことに私は、魯国の山沢の婦人がただ一人、節操を守り義を持して、公義に背かぬ様子を見た。山沢の婦人でさえこの様だとすると、ましてこの国の朝臣や士大夫達が、どれ位君に忠実かということとは、推して知ることが出来る。だから、帰国を要請したい」と。斉君はそれを許した。一方、魯君はそのことを聞いて、婦人に束帛（両端から巻いた帛）百端（端は、長さの単位で、四・五米）を賜り、義姑姉という尊号を贈ったのである。

本図は、左から、二騎の斉軍將兵（右向き）、右手で母の右手を執る子供、左腕に兄の子を抱く魯義姑姉（共に左向き）の、四人を描いたものである。保存も良い。当墓における列女伝図中、本図が最大の画幅を擁していることは、前述の如く、そのことこそが、元来北壁四層の最後に位置すべき本図の、南壁へと移された理由であろうと思われる。そして、本図はまた、西壁四層の19魯秋潔婦図（図四十五）、北壁四層の29楚昭貞姜図（図七十二）、30宋恭伯姬図（図七十五）、31梁節姑姉図（図七十七）などと共に、大



図八十九 魯義姉妹図

変劇的な図像構成を有するものとなっている。本図は、斉將に追い詰められて、尋問される魯義姉妹を表わしたもののだが、見事に描かれた二騎の將兵との間の緊迫した雰囲気を含に伝える点、当墓の列女伝図において屈指の優品に上げられるもので、その芸術的な達成度を評価すべき図像と言えよう。

ところで、幸いなことに、本図については四例程の類例が残されているので、以下順次それらを見てゆくことにしよう。まず図八十九に掲げるのは、後漢武氏祠画像石の武梁祠三石一層に描かれた、魯義姉妹図である（榜題「兄子」「義姉妹」〈共に上欄、「姉妹」〉。図八

十九は、画面右から、左腕に兄の子を抱いて、左に振り返っている魯義姉妹、その右手を執ろうとする子供、魯義姉妹に掴み掛かろうとする歩兵、その左に一騎兵及び、二頭立ての馬車に乗る齊將軍を描いたものである（全員右向き）。図八十九の構図は、本図に酷似していることが知られよう。このことは、既に漢代、何らかの列女伝図の粉本が確実に存在していたことを、強く示唆する一例である。さて、後漢武氏祠画像石には現在もう一図、魯義姉妹図が残されていて、図九十に示すのが、前石室七石一層のそれである（榜題「齊將□」「義姉」「義婦」「義親子」。図九十は、右から、侍者、齊將軍（共に左向きに立っている）及び、左腕に兄の子を抱いて跪く魯義



図九十 魯義姉妹図



図九十一 魯義姑姉図（伝顧愷之筆摸刊）

姑姉（右向き）と、その子供を描いたものである。その魯義姑姉の榜題「義婦」の本図と一致するところが、大変貴重と言える。図九十を本図、図八十九と比較すると、左右が反転し、騎兵もおらず、魯義姑姉が跪いているなどの特徴がある。さて、図九十の図柄に關し、例えば長廣敏雄氏編『漢代画像の研究』二部「武梁石室画像の図象学的解説」13（69頁）に、「なお、前石室第七石には義姑姉は「義婦」として出ており、束帛を賜わる場面が描かれている」（川勝義雄氏執筆）とされるのは、明らかに誤りで（魯義姑姉が束帛を受けたのは、

「斉将〔軍〕」からでなく、魯君からである。梗概参照）、従って、魯義姑姉の右の二人は、斉の将兵とすべきである。川勝氏は「斉将〔車〕」榜題を読み損なわれたものと思われる。さらに遺憾なことは、近時の巫鴻（Wu Hung）氏もその誤りを踏襲されていることであろう。そして、図九十の二人が手にしているのは、例えば林巳奈夫氏が、「指麾用の旄」とされるのに従うべきである（旄は、飾りの付いた旗）。このことから、図九十もやはり、本図や図八十九と同じく、魯義姑姉が斉将軍と対話している場面を表わしたものと考えられる。次に、図九十一に示すのは、伝顧愷之筆の摸刊図である（榜題「魯義姑姉」）。右端に、兄の子を抱いて左向きに立つ魯義姑姉、その左に、右手を上げて左を振り向くその子供、弓矢を持つ斉将軍と四人の斉兵（二人が弓、二人が剣を握る。いずれも右向き）を描いている。当図の魯義姑姉やその子供の構図は、本図や図八十九に酷似するが、騎馬兵等が描かれず、斉の将兵を立ち姿に表わす点、当図は図九十の系統に属するものと言えよう。最後に、図九十二に、北魏司馬金竜墓出土木板漆画屏風の三塊裏一層に描かれた、魯義姑姉図を掲げる（榜題「魯義姑姉」）。図九十二は、右手に兄の子を抱き、左手で己れの子の右手を執って、左向きに立つ魯義姑姉と、その背後（右）の子供（左向き）を描いたもので、斉の将兵が



図九十二 魯義姑姉図

描かれていた筈の、左側の画面を欠くことが、甚だ惜しまれる。当図の魯義姑姉は、その子供が背後に回っているものの、本図と酷似することが知られよう。さて、本図は、後漢武氏祠画像石（図八十九、図九十）と共に、伝

顧愷之筆の摸刊図を始めとする、後代の魯義姑姉図に、一定の範型を提供するものであることが、確実に見て取れるのである。この点において、本図は、魯義姑姉図その他の漢代図像の研究史上、極めて重要な位置を占める、第一級の資料であることが疑いない。

37 魯漆室女図（口絵 37^㉔ へ 37、38）

† 榜題「魯漆室女」 「——」

図九十三に、南壁一層第二の列女伝図、魯漆室女図を掲げる。本図は本来、西壁四層右端に描かれた、晋范氏母図（列女伝卷三・11）の右に、位置すべきものであることは



図九十三 魯漆室女図

前述した。本図の基となった、列女伝巻三・13の粗筋を示せば、次の通りである。

魯漆室女梗概

漆室の女というのは、魯の漆室邑（山東省）の女のことである。女は何処へも嫁がず、婚期はとうに過ぎていた。魯穆公の代のこと、君主は既に年老いて、太子はまだ幼少である。女が柱に寄り掛かり、嘯く（声を長く引いて歌うこと）と、付近の者達はその声を聞いて、一人残らず惨ましい思いに捉われる。或る時、隣家の婦人が女と共に外出し、女に向かつて、「どうしてあなたの歌声は、このように悲しいのか。結婚したいなら、私があなたの夫を捜そう」と言う。女は、次のように言う。「おや、あなたはもう少し、賢い女性かと思つたのに。何故私が結婚のことで楽しまず、悲しもうか。私が悲しむのは、魯君が老いて太子が幼いためである」と。婦人が笑つて、「それは大夫の仕事である。私達女に何の関わりがあろうか」と言うと、女は、次のように言う。「それは間違っている。あなたが物事を知らないだけのことである。現在、魯君はすっかり年を取つてしまった。人は年を取ると、必ず悖りを犯す。一方、それを防ぐ筈の太子はまだ若い。若者は必ず愚かなことを為出かす。そして、その愚悖の間に、姦偽が次々と生じよ

う。そのことから、国難がこの魯を襲えば、君臣、父子は共に辱しめを受け、災いは庶民へも及ぶ。その内、婦人だけがどうして災いを逃れられようか。私が心配なのはこのことである。それなのにどうしてあなたは、私達女には関わりがない、などと言うのか」と。婦人はそれを聞き、詫びて、「私の思いも及ばぬことに、あなたは先のことまで深く見通していることよ」と言う。果して三年後、魯に内乱が起こり、斉や楚が魯を攻撃し始めたので、魯は屢々侵略に曝された。そのため、魯の男性は戦闘に従事し、女性

は物資の輸送に駆り出されて、休む暇さえなくなった。

本図は、背後

の木に寄り掛かり、隣家の婦人と対話する、魯漆室女を描いたものである。魯漆室女は、右を向いて立ち、その片手が木に掛けられてゐるように見える。画



図九十四 魯漆室女図



図九十五 魯漆室女図（伝顧愷之筆摸刊）

面の右に、左向きに立っている女性（隣家の婦人であろう（その顔の左に、「隣」字の下の残画等が認められる）。本図は目下、現存が確認出来る唯一の漢代の魯漆室女図として、非常に貴重なものとしなければならぬ。図九十四に示すのは、列女仁智図巻の8魯漆室女図である（榜題「魯漆室女」、頌「漆室之女、計慮深妙。惟魯且乱、倚柱而□、君老嗣少、愚悖奸生。魯果擾乱、齐伐其城」）。併せて、図九十五に、当図と深く関連する、伝顧愷之筆の摸刊図を掲げよう（榜題「隣婦」「漆室女」。図九十四には錯簡があり、

また、その右半を失っているらしいことは、前述の如くである（注33参照）。また、図九十四と図九十五との密接な関わりは、早く清、阮元によって指摘されていることも先に触れた。さて、両図は共に、木の幹に倚る魯漆室女と隣婦とが、話し合っている場面を描いたものと思しい。中で、阮元が、「若……漆室女所倚之木柱、皆与顧圖中相似」（阮福跋）と指摘した、両図の魯漆室女の背後の木は、その上部が奇妙なことや、図九十四の上端左及び、魯漆室女の腰の左辺に鳥の頭の見えることなど、なお今後の一考を要する（列女伝本文には、「倚柱」とあり、その柱は、木の幹の意であろう）。さて、本図は、図九十四、図九十五と全く同じ構図をもつことが知られるのである。即ち、顧愷之による魯漆室女図は、間違いなく漢代列女伝図の構図を継承して描かれたものと断じて良い。

38—41 列女 a—d 図（口絵 38—41）
↑ 榜題 —

図九十六—図九十九に、列女 a—d 図を掲げる。図九十三魯漆室女図（口絵 37）の右に続く、四人の女性の立像図だが、相当傷んでいて現在、内容が不明の四図である（図九十六の顔の左下に、「夫人」の二文字が認められる）。仮に列女 a—d と呼んでおくが、この四図の内容考証は、今



図九十七 列女b図



図九十六 列女a図



図九十九 列女d図



図九十八 列女c図

後の検討に俟ちたい。

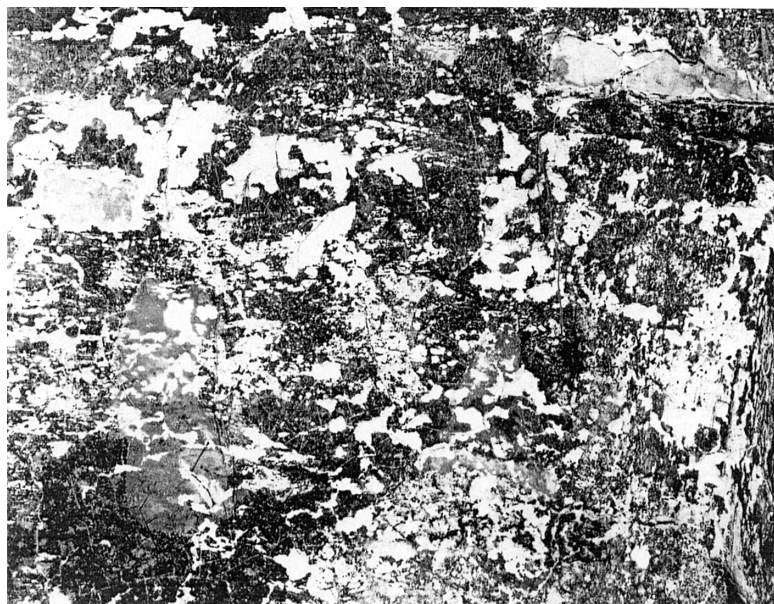
42 梁寡高行図 (口絵42)^(旧43)

† 榜題「^{削鼻}□□、一往不改、^(高)行処梁」

図百に、当墓の梁寡高行図を掲げる。本図は、南壁一層最後の列女伝図であり、また、前述の如く本来ならば、北壁四層始めの29楚昭貞姜図(列女伝巻四・10)の次に位置すべきものである。本図の基となった、列女伝巻四・14の粗筋を示せば、次の通りである。

梁寡高行梗概

高行というのは、梁の寡婦のことである。その高行は生まれ付き、美人の誉れが高く、俊敏な性質をもっていた。不幸なことに、高行は、年若くして未亡人となってしまったが、決して再婚しようとしなかった。梁の貴人達は、競って高行を娶ろうとしたけれども、これまでに誰一人、成功した者がない。或る時、梁王がそれを聞き、高行の許へ宰相を遣して、後宮に召そうとする。高行は、次のように言う。「私の夫は早死にし、寿命の短い犬や馬より先に、溝へ埋められた。私は、身を夫の柩に捧げ、その遺児を養育しなければならぬ。私の身を自由することは、出来ない相談なのである。だから、私は、数多くの貴人の求婚を、



図百 梁寡高行図

これまで全て斥けた。しかし、今また、王が求婚されている。私は、次のように聞いている。婦人の義は、一度嫁いだならば、二度嫁ぐことはなく、貞信の節操を全うする、と。亡き夫を忘れて王に嫁ぐことは、信に背くことである。また、身分の高さに惹かれて夫を忘れることは、貞に外れることである。もし義を捨てて利に就くならば、それはもはや人とは呼べまい」と。かくて、高行は鏡を引き寄せて刀を取り、己の鼻を切り落として、次のように言う。「これで私は刑せられた。ここで私が死なないのは、子供を孤児にしないためである。王が私を求められるのは、偏に私の美貌の故である。ところが、私が今や前科者となつてしまった上は、王からも見逃して貰えよう」と。そこで、宰相はこの顛末を王に報告する。王はそれを聞いて、未亡人の義を大なるものとし、また、行を高いものとして、その家の徭役、賦税を免じ、未亡人に高行という尊号を賜つたのである。

本図中央のやや上方に、三行に互る榜題（題記）があり、図百一に、その部分を掲げよう。図百一は、右から、

（高）
行処梁

一往不改

劓鼻
（刑身）
□□



図百一 榜題部分

と解説することが出来る。この三行は、列女伝巻四・14 梁寡高行の本文及び、頌の、

妾聞、婦人之義、一往而不改、以全貞信之節……

頌曰、高行処梁、貞專精純。不貪行貴、務在二一

信。不_レ受_二梁聘_一、劓_レ鼻_二刑身_一。君子高_レ之、顛_二示後人_一

の傍線部三句を引いたものと認められ、左から、

劓_レ鼻（刑身）、一往不改、（高）行処梁

と読むべきものと思われる（劓は、鼻切る、また、割く意。刑は、罪すること）。頌の第六句「劓_レ鼻_二刑身_一」が、冒頭に回されているが、梁寡高行の行為を強調すると共に、この三句で当該のストーリーを表わそうとしたものであろう。



図百二 梁寡高行図

この榜題は、漢代の列女伝本文の姿を今日に伝える、極めて珍しいもので、列女伝本文、また、頌の一部を図像の中に記す点、非常に貴重な資料と言わなければならぬ。本図も相当、剝落と薄れが目立ち、図柄が見分けにくくなっているが、後掲図百二―図百四を参考とするに、右に、梁寡高行、左に、梁王の使者（列女伝「相」を描いたものである。梁寡高行は或いは、衣の様子から左を向いて腰掛けているものと思われ（図百四参照）、また、右手が上がっている、右手には鏡を持ち、左手に短刀を持つているものと思われる（列女伝「援鏡持刀」）。図百二、図百三参照。使

者は、右を向いて立っている。さて、本図には、伝顧愷之の摸刊図を含め、三図像の伝存が確認されるので、以下にそれらを示してゆこう。図百二に掲げるのは、後漢武氏祠画像石、武梁祠三石一層に描かれた梁寡高行図である（榜題「梁高行」「奉金者」「使者」）。図百二は、まず右端に、右手に扇（便面）を持つて左向きに立つ侍女、その左に、左を向いて台上に跪く梁寡高行を描く。梁寡高行は、右手に飾りの垂れる鏡を顔の前へ掲げ、左手に短刀を持っている。また、その左に、右向きに跪き黄金を差し出す侍者（榜題に「奉金者」とある）、さらに、旛を掲げて右向きに立つ、梁王の使者を描く。また、左端の、御者の乗る二



図百三 梁寡高行図



図百四 梁寡高行図（伝顧愷之筆摸刊）

頭立ての馬車は、梁王の使者が乗って来たそれであろう。右上方には、幔幕が描かれている。図百二の、梁寡高行と使者とが向き合う構図は、本図と全く等しい。次いで、図百三に示すのは、後漢武氏祠画像石、左右室八石三層の梁寡高行図である。図百三は、本図及び、図百二の梁寡高行と使者との左右を反転させた形となっており、右から、使者、侍女（共に左向きに跪く）、梁寡高行（右向きに跪く）の三人を描いたものである。梁寡高行はやはり、左手に飾りの垂れた鏡を顔前へ掲げ、右手に短刀を持っている。本図また、図百一、図百

二の構図の酷似することは、漢代列女伝図の共通の粉本のあったことを物語る。最後に、図百四として、伝顧愷之筆の摸刊図を掲げる（榜題「梁使者」「梁寡高行」）。図百四は、図百三と同じく左右が反転し、右に巻物を捧げて左向きに立つ梁王の使者、左に腰掛けて左手の指で己れの鼻を撮み、右手で短刀を握り上げる、梁寡高行を描いたものである。鏡は机の上の台に据えられている。当図を本図及び、図百二、図百三と比較すると、細部こそ異なるものの、伝顧愷之筆の摸刊図における、二人の登場人物の構図は、やはり漢代列女伝図に溯るものであることが、はっきりと分かる。そして、本図はその榜題を含め、図百二、図百三共々、伝顧愷之筆摸刊図の来源を考える上で、極めて重要な資料とすべきこと、多言を要しまい。

以上が、和林格爾後漢壁畫墓中室西、北壁三、四層及び、南壁一層に描かれた列女伝図、全四十二図（口絵1—42）各図の概要である。該墓が発見されたのは、一九七一年のことであり、それから丁度四十年が経過したことになるが、それ以前は勿論のこと、以後現在に至るまで、該墓に見られる如く規模の大きな列女伝図の伝存例は、報告されていない。このことから顧みて、該墓の列女伝図の出現は、列女伝及び、列女伝図の研究史上、二十世紀における最大の

卷一																							列女傳								
三											二												女								
5	4	3	2	5	4	3	2	1	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	女							
孫叔敖母	曹釐氏妻	許穆夫人	楚武鄧曼	楚莊樊姬	秦穆公姬	晉文齊姜	齊桓衛姬	周宣姜后	魯師春姜	齊田稷母	魏芒慈母	魯之母師	鄒孟軻母	楚子羆母	魯季敬姜	齊女傅母	衛姑定姜	周室三母	湯妃有嬖	啓母塗山	契母簡狄	棄母姜嫄	有虞二妃	女							
②⑤	②④	②③			①⑧	①⑦	①⑥	①⑤	①④	①②	①③	①①	①⑩	①⑨	①⑧	①⑦	①⑥	①⑤	①④	①③	①②	①①		和							
																							武								
④	③	②	①																				仁								
○	○	○	○	○	○	○	○	○	†	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	摸							
○	△	†		○					○	○		○		○					○		○		△	†	司						
○†																							他								
†殘片a																			†沂南漢墓				†今本本文、 圖像欠				†孝子傳圖				備考

発見とすべき画期的なものであり、その重要且つ、貴重なことは、並ぶものがない。小稿は、該墓の列女伝図の概要を述べて、武梁祠の列女伝図その他の図像との簡単な比較を試みた、基礎的論攷に過ぎず、該墓の列女伝図、また、その各図像の文学史的、美術史的な意義、価値についての本格的な研究は、なお今後の検討に俟たなければならない。

小稿を結ぶに当たり、当墓の列女伝図を中心として、伝顧愷之筆の摸刊図も含め、これまで比較、対照に用いてきた、六朝時代以前の現存列女伝図一覧を掲げておく。表の上段は、今本列女伝の巻、話数及び、標題を示したもので、その下段を六段に分けて、段中の○印で、その遺品に上段当該図像の現存する

八 六																										五										四																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
14	10	15	12	10	9	8	7	6	5	4	2	1	14	12	10	5	4	2	13	11	10	9	8	7	6																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
班婕妤	齊鍾離春	京師節女	梁節姑姊	周主忠妾	魯秋潔婦	齊義繼母	代趙夫人	魯義姑姊	蓋將之妻	楚昭越姬	楚成鄭咎	魯孝義保	梁寡高行	衛宗二順	楚昭貞姜	黎莊夫人	蔡人之妻	宋恭伯姬	魯漆室女	晉范氏母	晉羊叔姬	魯臧孫母	齊靈仲子	衛靈夫人	晉伯宗妻																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
			③①		②⑩		①⑨					③⑤		③⑥		③④		③③					③②		④②					②⑨					③⑩		③⑦		②⑧		②⑦		②⑥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
◎†			⑦		⑤		◎†			⑥		◎†									◎†			④																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												</	

ことを表わした。その下段六段に用いた略号は、次の通りである。

和——和林格爾後漢壁畫墓

武——武梁祠

仁——列女仁智図卷

摸——伝顧愷之筆摸刊本

司——北魏司馬金竜墓出土木板漆画屏風

他——その他

当墓の列女伝図に関しては、○印の中に通し番号（口絵番号）を入れておいた。武梁祠の段における◎印は、武梁祠以外にも同じ図像が存することを示す。△は、存疑また、断片であることを表わしている。最下段は、備考欄である。

段中の†は、注記を示し、備考欄にその内容を記した。伝顧愷之筆摸刊本（摸）には、表に掲げた以外の列女伝全話の図像を存しているが（巻一・15魯師春姜のみ欠）、それらは省略に従う。

現存列女伝図一覧を見ると、項目数は全五十項目を数えることから、列女伝全百五箇条中のほぼ半数近く、五十図に及ぶ列女伝図の現存することが知られよう（伝顧愷之筆摸刊図を除く。また、続列女伝の一〈巻八・14班婕妤〉を含む）。そして、その内、和林格爾後漢壁画墓にしか図像の存しないものが十八図を数え、その約四割弱（36%）を占めることは、当墓の列女伝図の貴重さを物語る数値と言える（摸刊図存。また、当墓の不明六図は数えない）。

また、一覧の五十図において、当墓の列女伝図に存しない図像は、十三図を数える（巻一・1を除く）。そして、その内、武梁祠のみに存するものが三図（巻五・8、15、巻六・10）、また、列女仁智図巻のみに存するものが三図（巻三・2、6、8）、北魏司馬金竜墓出土木板漆画屏風のものに存するものが六図（巻二・5、巻四・4、5、12、巻五・2、巻八・14）、さらにその両者（仁、司）に存するものが一図（巻三・7）となっていて、それらはいずれも目下、伝顧愷之筆摸刊本にしか類例のない、貴重な列女伝図としなければならない。

さて、当墓の列女伝図の出現によって、多数の漢代列女伝図の伝存が判明したことは、今後の本格的な列女伝図研究の進展を、促がさずにはいないものがある。取り分け小稿において、その都度指摘を繰り返してきた、顧愷之の列

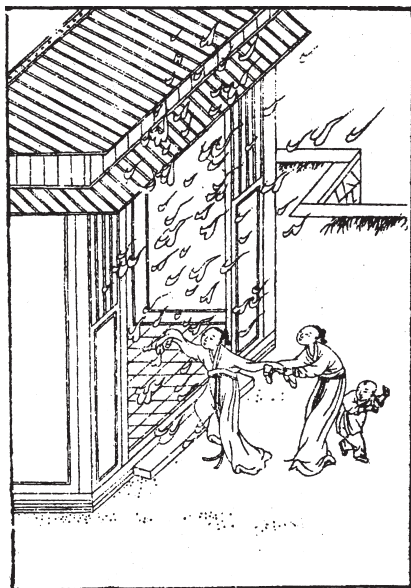
女伝図と漢代列女伝図との間に窺われる深い関連など、極めて注目すべき問題の一つと言えよう。

付記

当墓の列女伝図その他については、『和林格爾後漢墓壁画孝子伝図輯録』（二〇〇九年3月。再版、文物出版社、二〇〇九年11月）が公刊された。なお、関連する近稿「顧愷之前後―列女伝図の系譜―」を用意している。小稿は、平成22年度科学研究費補助金基盤研究(B)による成果の一部である。

注

③⑥ 漢代列女伝図の面影をよく留めているのが、四部叢刊所収の明刊本の梁節姑姉図である（参考図二参照。参考図二の梁節姑姉と友人の構図は、本図及び、図七十八と全く同じである。



参考図二 梁節姑姉図

図七十九の子供は、友人の右へと移っている。

- ③⑦ 長廣敏雄氏編『漢代画像の研究』（中央公論美術出版、昭和40年）

- ③⑧ 巫鴻 (Wu Hung) 氏, "The Wu Liang Shrine: The Ideology of Early Chinese Pictorial Art" (Stanford University Press, Stanford, California, 1989, 中国語版『武梁祠—中国古代画像芸術的思想性』〈柳揚、岑河氏訳、三聯書店、二〇〇六年〉付録A 258頁（中国語版、附録一 276—277頁）

- ③⑨ 林巳奈夫氏編『漢代の文物』（京都大学人文科学研究所、昭和51年）482頁、図版25頁10—96参照。

- ④⑩ 魯義姑姉図は、孝子伝図を継承する二十四孝図の内にも存する（孝行録系19「魯姑抱長」による魯義姑図）。二十四孝の魯義姑図は、一般に本図や図八十九の構図を受け継ぐことに注意され、齊將軍が騎兵姿に描かれているが（参考図三上、魯義姑



（稷山馬村四号墓）



（滎陽司村宋代壁画墓）

参考図三 魯義姑図（二十四孝）

図参照。山西省考古研究所『平陽金墓軀雕』〈山西人民出版社、一九九九年〉図版254に拠る、中で、滎陽司村宋代壁画墓のそれなど（参考図三下参照。標題「魯義姑行孝」。鄭州市博物館「滎陽司村宋代壁画墓発掘簡報」〈『中原文物』82・4、一九八二年12月〉所収の摸図に拠る）、図九十と同様に、齊將軍を単なる立ち姿に描く系統の図柄の残されていることが、非常に興味深い（なお後掲の図九十一参照）。即ち、漢代における本図や図八十九と図九十との二系統の魯義姑図の構図は、殆どそのまま、遼・金時代の二十四孝図のそれに受け継がれていることが知られるのである（二十四孝図については、拙著『孝子伝の研究』〈佛敎大学鷹陵文化叢書5、思文閣出版、平成13年〉II三参照）。

- ④⑪ 『京都語文』15所収の口絵37、38は当初、二図の列女伝図と判断したものだが今般、後掲図九十五と比較対照するに、口絵

37、38を併せて、一図の魯漆室女図と見做すべきものであることが判明した。よって、口絵37、38（列女a）を一図にして口絵37とし、改めて小稿冒頭にカラー図版一葉を掲げ直すこととする。従って、当初の以下の口絵39—43が一つ分繰り上がって口絵38—42となり、列女b—eも同様に列女a—dとなることを、ここで断わっておきたい。

- ④⑫ 図百三は、劉興珍、岳鳳霞氏編、邱茂氏訳『中国漢代の画像石—山東の武氏祠』（外文出版社、一九九一年）図183に拠る。